

ハタハタの漁況予測について

水産総合研究所資源管理部 研究員 三浦 太智

ハタハタは青森県日本海において冬季の重要な漁獲対象資源となっていますが、漁獲量の年変動は非常に大きく、漁業収入は不安定になっています。漁業者の営漁計画に役立つハタハタ漁況の予測開発に取り組んでいますので紹介します。

1. 平成24年漁期のハタハタ漁況予測

秋田県と本県のハタハタの年間漁獲量の動向は似通っていることから、秋田県が公表するハタハタの推定漁獲対象資源量と本県漁獲量との関係から、本県における平成24年漁期の漁獲量を600トン(図1)、また、沿岸水温や大潮の時期から初漁日を12月3日と予測しました。その結果、平成24年漁期の漁獲量は約200トンと予測を大きく下回り、(図1)、初漁日は12月2日で、ほぼ予測通りでした。

漁獲量が少なかった要因は、秋田県や本県沿岸に産卵のために帰ってくるハタハタが推定よりも少なかったためと考えられました。なぜ、産卵群が少なかったのか、その要因を解明する必要があります。

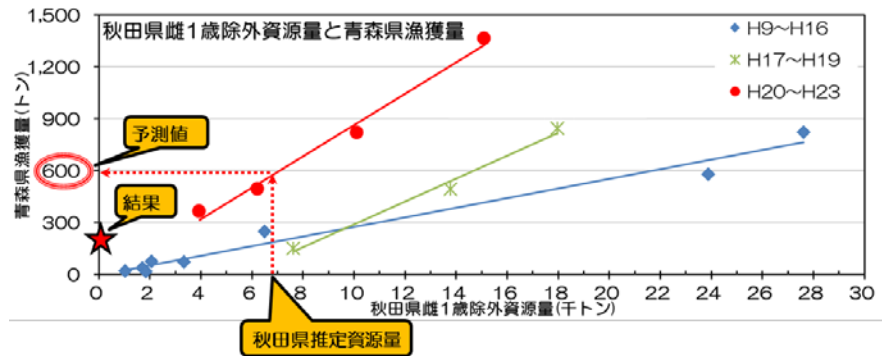


図1 秋田県推定資源量と青森県漁獲量との関係

2. 今後の展開

幼魚の分布状況を今後の漁況予測に反映させるため、本県日本海沖合の水深100m~300mにおいて平成24年4~7月に、試験船青鵬丸によるオッタートロール調査を行いました。4~5月には平成23年生れの1歳魚(全長8~12cm)、6月には平成24年生れの0歳魚(同~6cm)が高い密度で分布していました(図2)。7月には0、1歳魚ともにほとんど分布しなくなり、本県沖合から移動したと考えられます。これらのハタハタは平成25年の冬以降に漁獲加入するので、今後の動向に注目しています。

また、本県や秋田県沿岸で産卵するハタハタが、山形県や新潟県沖合だけでなく、能登半島よりも西側の海域まで分布しているとの情報があります。今後は秋田県との密接な情報交換に加えて、国や他県の研究機関とも連携してより精度の高い漁況予測の開発に取り組んでいきます。

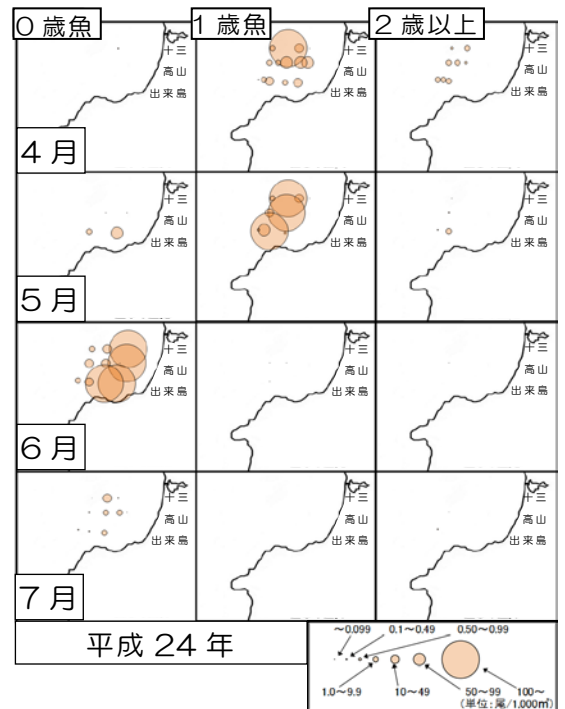


図2 青森県日本海沖合におけるハタハタの分布密度